

## 恩納村の臼太鼓 (ウシデーク・ウスデーク)

臼太鼓(ウシデーク、ウスデーク)は女性たちが、ムラの拝所である神アサギや宗家の神庭、遊び庭(アシビナー)などで奉納する芸能のひとつです。音取り(ニードウイ)と呼ぶ小鼓を持った年長者の女性群を先頭に、幾重かの円陣が作られ、反時計まわりに輪を描きながら踊ります。臼太鼓の歌詞には子孫繁栄や五穀豊穡、健康祈願など「祈り」の要素が込められています。臼太鼓はムラの神事が無事に終了したことを祝って踊ったとされ、古典女踊りの基礎をなす手法が含まれていることから、芸能史的にも重要な踊りだと言われています。かつては村内の多くのムラで披露されていたと考えられますが、現在村内で残っているのは5か所です。



名嘉真のウシデーク

**名嘉真**  
『いやしの里 名嘉真』には「かつてのウシデーク衣装は、紺地着で、黒帯の前結び、若い者は赤い布を頭に巻き、後ろに垂らした。他の踊り手は、紫の布を巻き、後ろに垂らした。太鼓打ちの踊り手は頭に白タオルをウサギ結びにした。履物はなく裸足であった。現在の衣装は紺地着に黒帯の前結び。踊り手は白はちまきの前結びで、太鼓打ちの踊り手も頭に白はちまきを前結び

する。履物は白い足袋に草履はき」と記されています。旧暦8月1日に根屋<sup>ニヤ</sup>であるクンジャミ(国神屋)で太鼓出しを行い、ヌール屋での祈願後、練習を始めます。旧暦8月9日には午前中にヒドウイと称した全体練習や御願を行い、夕方に本番となります。アサギ庭、ヌール屋御庭での演舞の後、大島(元島)から新島を通り、浜地区へむけて道ジュネーを行います。旧公民館前で演舞したあと休憩を挟み、先ほどの道を戻り再度演舞して終了となります。当日は午前中から夜遅くまでたっぷりと儀礼が展開されます。

### 恩納

『恩納字誌』には「喪失していたのを1928(昭和3)年恩納ナベ歌碑建立式典の場合に復活。それ以後再び中絶していたのを、1977(昭和52)年、浦崎澄(恩納ノ口となる)が中心となって復活することができた」とあります。同年4月17日の沖繩タイムスでも、恩納区のウシデークが復活した記事が掲載されています。「自然消滅寸前のウスデークを復活させた老人の意気込みに、部落内外から拍手かっさいを浴びている。現在、90歳を超えた老人が断片的に憶えていたのをつなぎ合わせ、完全によみがえらせた。手きぐりの中から生まれた60余年ぶりのウスデーク。踊り手の19人の老女たちは、昔、恩納ナベが率先して踊ったように万座毛で踊るのを一番の楽しみにしている」とあります。

恩納ナベ歌碑建立記念日に合わせて、新暦11月10日にウシデークが行われています。



恩納のウシデーク